

二〇一九年一月に中国の武漢市で確認された新型コロナウイルス関連肺炎は、まず中国国内に広がり、その後、急速に他国に感染が拡大し、あつという間にパンデミックを引き起こしました。感染対策として、三密（密集、密接、密閉）の回避とソーシャルディスタンスが有効とされ、またマスクの着用、手洗い・消毒の励行とともに、「換気」の重要性がクローズアップされています。

ところで、ナイチンゲールといえば「換気」を連想する人も多いのではないでしょうか。彼女は多くの著書の中で、「新鮮な空気」がいかに健康を保つために必要か、「汚れた空気」がいかに病気を引き起こす原因となるかを繰り返し伝えていきます。

全世界がコロナ禍に見舞われた二〇二〇年は、奇しくもナイチンゲール生誕二〇〇年の年。「ほら、私が言ったとおり、換気は重要だったでしょ」というナイチンゲールの声が聞こえてくるような気がしませんか。彼女の先見の明に驚くばかりです。

(編集部)

目次

感染症医が読む『病院覚え書き』

——細かく間違えるより、ざっくり正しく ● 岩田健太郎 001

ナイチンゲールはなぜ「換気」にこだわるに至ったのか

——一九世紀ロンドンの医療および公衆衛生事情から ● 徳永哲 015

『看護覚え書き』にみられるミアズマ説とエフルーピア ● 平尾真智子 031

こうもりの翼と薔薇の花——ヴィジュアルイズ化された兵士の死亡原因 ● 丸山健夫 043

ナイチンゲール、妊産婦の死亡原因を追究する

——産褥熱と助産師学校閉校 ● 岩田恵里子 075

「コラム」

ナイチンゲールが晩年まで苦しんだ感染症？——ブルセラ症 ● 今岡浩一 067

産褥熱とゼンメルワイス ● 百島祐貴 089

感染症医が読む『病院覚え書き』

——細かく間違えるより、ざっくり正しく

岩田健太郎

## 病院が病人に害を与えている!?

フロレンス・ナイチンゲールが『病院覚え書き』(Notes on Hospitals)を著したのは一八五九年のことである。「感染症医として、本書について述べてほしい」という編集部の依頼を受け、私は第三版(一八六三年)を読んでみた。

実に興味深い。

冒頭。いきなり、「病院がそなえているべき第一の必要条件は、病院は病人に害を与えないことである」とある。そして、こう続く。「ここに明言すると、それは奇妙な原則であると思われるかもしれない」と。

ナイチンゲールは「病院は病人に害を与えないこと」が第一の原則であると考えていた。そのことは、取りも直さず彼女が「病院が病人に害を与えている」と考えていたことを意味している。そして、彼女はまた、世間はそれを「奇妙」に思うであろうと考えた。世間は「病院が病人に害を与え」るわけがないと考えていたのだ。ナイチンゲールと(当時の)世間一般の認識にはギャップがある。ナイチンゲールはだからこそ、冒頭にこの文句をもってきたのである。

では、現代の我々はナイチンゲールの言葉をどう思うだろうか。一般の方々が病院に入院するとき、彼らはこう考える。「退院するときには、入院したときよりもずっと元気になってい

るだろう」と。「入院するとさらにひどい病気にかかるだろう」とは夢にも思っていないだろう（思っていれば、入院するまい）。しかし、我々医療者は知っている。「入院するとさらにひどい病気にかかる患者」など、少しも珍しくはないことを。それも、原疾患の増悪とは限らないことを。「病院が病人に害を与える」ことなど、ざらにあることを。

アメリカ医学研究所（IOM）が、アメリカでは毎年最大で一〇万人近くの患者が医療行為を原因に死亡していると発表したのはセンセーショナルであった。<sup>1</sup>交通事故で四万人弱が毎年亡くなるアメリカで、これは驚異的な数字である。<sup>2</sup>翻って、日本では何人の命が医療行為のために失われているのであろうか。確たるデータは存在しないが、おそらくは年間、万の単位を下回らないであろう。

一般の方々は「病院に入院して自分の容態が悪くなる」とは思っていない。悪くなってもよい、とも思わないだろう。病院が原因で病気になったり、死亡することも許容しないはずだ。我々医療者の多くがそれを「仕方ないこと」と肩をすくめ、「業界内の常識を知らない奴らは、これだから困る」と言わんばかりの目つきでサラリとこの現象を流してしまうのとは、実に対照的だ。

